

CNALレポート・ジャパン

Conferencing industry News report, research & Analysis - CNA Report Japan

創刊：1999年12月

発行日：毎月15日・月末

取材・編集・発行：橋本啓介

テレビ会議・ウェブ会議・電話会議システム専門 定期レポート

2010年3月ラドビジョンインタビュー

編集:editor@cna.jp 広告:pr@cna.jp 読者登録:<http://cna.jp>

Copyright 2010 CNA Report Japan. All rights reserved.

インタビュー特集

RADVISION Japan インタビュー 3回シリーズ

第3回目



RADVISION Japan 株式会社
テクノロジー事業開発本部長
板橋 達夫 氏

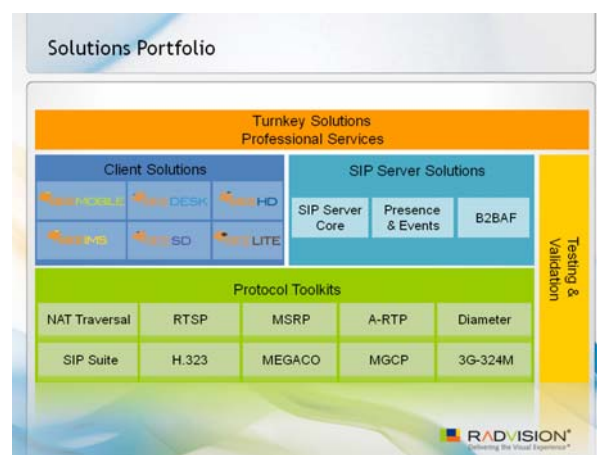
聞き手：CNAレポート・ジャパン 橋本啓介

板橋氏は、1983年電気通信大学計算機科学科を卒業。富士ゼロックス株式会社入社。Xerox Starの日本語対応J-Star開発に従事。米国XEROX駐在時代はゼロックス社のXNSとOSI、インターネット(当時のDARPA Net)間のゲートウェー製品開発を行う。90年にソニー株式会社入社。同社に16年在籍し、デジタルセルラー携帯電話立上げ後、電子新聞、FeliCaのネットワーク化、ITS関連の開発などに携わる。その後、モバイル系のベンチャー企業を経て、2009年からは、RADVISION Japan株式会社のテクノロジー事業開発本部長を務め、今に至る。一貫してエンジニア畑でキャリア

を積み、今後のビジュアルコミュニケーションの可能性に惹かれRADVISIONに入社。

橋本：ラドビジョンの中でのTBU部門の位置づけと事業について教えてください。

板橋氏：前回のインタビューで登場した後藤が統括するNBU部門は、多地点接続装置などのインフラ装置製品を販売する部門ですが、一方、私が所属するTBU (Technology Business Unitの略)は、H.323、SIP、3G、IMSなどに準拠するV²oIP (Voice&Video over IP)製品を開発するためのソフトウェア開発キット(SDK)や、クライアント/サーバそれぞれのアプリケーション開発を迅速に行うフレームワーク製品の他、オールインワンのターンキーソリューション、及び検証に使用するテストツールなど、アプリケーション開発者向けの製品を包括的に提供し全世界に販売している部門になります。



RADVISION TBU 製品ポートフォリオ

開発はイスラエル、米国(NH)、中国(北京)に加え、2月

に発表したアエスラ社 R&D 買収によりイタリア(アンコナ)を加えた全世界 4 拠点体制で、豊富なエンジニアがビジュアルコミュニケーションに関連する様々な製品開発に従事しています。

現在、世界 700 社以上の顧客企業に当社の開発ツールキットやテストツールなどをご利用頂いております。NBU 部門も TBU の技術を活用して製品開発していますので、ある意味、TBU 部門の顧客になりますが、いずれにしても、これらの開発者の方々がラドビジョンの技術を活用し、通信端末やサーバなどのシステムを開発されています。

当社は、1992 年以來 18 年間世界の VoIP/ビデオ会議技術の発展と普及に貢献してきました。世界の主な通信端末には、当社の信頼性の高い技術が“裏方”として活躍しているということを、ぜひこの機会に知っていただければ有り難いです。

橋本：ビジュアルコミュニケーションのソフトウェア開発には、現在どういった課題があるのでしょうか。

板橋氏：如何に限られたリソースの中で、コストを抑え効率的な開発を行っていくか、に尽きますね。

ビジュアルコミュニケーションの開発と言っても多岐にわたり、一朝一夕で出来るものではありません。昨今インターネットが普及するとともに、それに併せて市場では多様な端末が見られるようになり、また一般電話網や 3G 携帯テレビ電話網など異種ネットワークとの相互接続も必要となってきました。NGN(次世代ネットワーク)もようやく全容があきらかになってきて、普及に向けて加速してきているのが最近の状況かと思えます。

そういった状況で開発部門が抱える問題としては、ソフトウェア品質の問題はさることながら、クライアントからの納期のプレッシャー、あるいは要求仕様の変更、バージョンアップ管理、バグ修正など多岐にわたります。人材もコストもリソースの限られた自社内で全て開発を行うことは、非常に難しくなっているのではないかと認識しています。

一つの製品に資源を使いすぎると、求められる複数の開発プロジェクトを同時進行させることができず、市場競争力を失います。

その上、製品化段階では、他社端末との相互接続検証も事前に実施しておかなければなりません。この検証も、全で一から行うとなると大変な負担と稼働を伴います。ちなみに相互接続性の担保は、市場投入後も付いて回る頭の痛い課題です。

橋本：そうすると、そういった開発者の方が抱える課題に対して TBU の製品は、どのようなメリットを提供できるのでしょうか。

板橋氏：当社の製品は、豊富な製品ラインナップを揃えていますのでさまざまなアプリケーション開発ニーズに対応できる点です。しかもそれらの技術と品質は、国際標準化団体などでの長年の実績に裏付けられています。

まずラインナップですが、当社は、冒頭にも述べた通りさまざまなプロトコルに対応する製品を、サーバからクライアント、テストツールまで各種 OS 向けにオールラウンドに提供しています。最近はとくに HD 対応の H.264/SVC や、アンドロイド OS 対応などの最新技術にも迅速に対応しています。

またインターネットの黎明期である 1992 年以來 ITU-T、IETF などの国際機関での標準化への取り組みにリーダーシップを発揮し、世界の主要なメーカーや通信事業者との共同開発、並びに、相互接続などの検証を行うなど業界全体の技術発展に貢献してきました。

そういった弛まぬ積み重ねの上に培われ、ワールドワイドに認められた経験に基づく、コンサルティングやトレーニング、受託開発などのプロフェッショナルサービスもあわせて提供しています。

おそらく、この様に標準化された技術や相互接続性に強みのあるツールキットやテストツールの豊富なラインナップに加え、アプリケーション開発の最初から最後まで手厚

くサポートできる体制を持った会社は世界において当社以外にはあまりないと思っています。

橋本：具体的には、こういった製品があるのか教えてください。まず開発ツールキットについてお願いします。

板橋氏：当社のルーツであり、現在ご提供中のあらゆる製品に組み込まれ使われているのがツールキットです。プロトコルツールキットにおいては、SIP、H.323 の他、RTP/ARTP、SDP、IMS-SIP、Java SIP、3G-324M をカバーするとともに、RTSP クライアント/サーバ、MEGACO/H.248 に対応した各種製品を提供しています。NAT Traversal も H.460/ICE/STUN/TURN 全てに対応、今後重要度を増す SIMPLE、MSRP にも準拠、これからは順次 BFCP、XDM などに対応予定です。

なお、開発ツールキットを包含するアプリケーション開発者向け製品としても、SIP サーバ製品構築フレームワークの B2BAF(Back to Back Application Framework)と、組み込み型クライアント構築フレームワークの MTF(Multimedia Terminal Framework)があります。

一方、昨年より H.264/SVC や HD 解像度に対応したビデオアプリケーション開発者向けに BEEHD ツールキットを発売しています。これは、より迅速な製品開発ニーズに応えるために、新しいラインナップとして追加しました。

今年は、この BEE シリーズのツールキットをさらに拡充していく予定です。

橋本：BEE シリーズ製品概要についてご説明いただけますか。

板橋氏：BEE シリーズは、ラドビジョンが持つ設計から実装、QA(Quality Assurance)までのすべてのノウハウをパッケージ化し、従来のツールキットよりもよりコストを抑え開発スピードを上げることができるターンキー型の開発キットです。

BEE シリーズでは、BEEHD の他に 3G 携帯端末向けに

Android 対応の「BEEMOBILE」、デスクトップアプリケーションに特化した「BEEDESK」、そして、BEEHD より低コストのチップセットで HD 端末を開発できる「BEELITE」も今年順次発売する予定です。

BEE シリーズの特徴としては、先ほど述べた開発ツールキットを特定のプラットフォームに最適化し、お客様が GUI や既存デバイスとの結合だけに集中いただけるという点が挙げられます。

橋本：BEE シリーズの開発例があればお伺いできますか。

板橋氏：BEE シリーズは、テレビ電話やビデオ会議システムに限らず、PC モニタ、セットトップボックス、プロジェクター、ノートブック/ネットブック、携帯端末、キオスク端末、デジタルサイネージ、監視システム、カーナビ、テレビ、ホームセキュリティ、ゲームなど、インターネットに接続するあらゆる映像コミュニケーション端末での利用を想定しています。

BEE の、最初の実例は、当社がサムソン電子と共同開発した「VC240」です。これは、サムソン電子の LCD ディスプレイと、テキサス・インスツルメンツ社の DSP(DM6467 - DaVinci)に、当社の BEEHD で開発したビデオアプリケーションをインテグレートし、オールインワンデスクトップ HD ビデオ会議システムとして開発した製品となります。映像コーデックは、最新の H.264/SVC HD に対応しています。

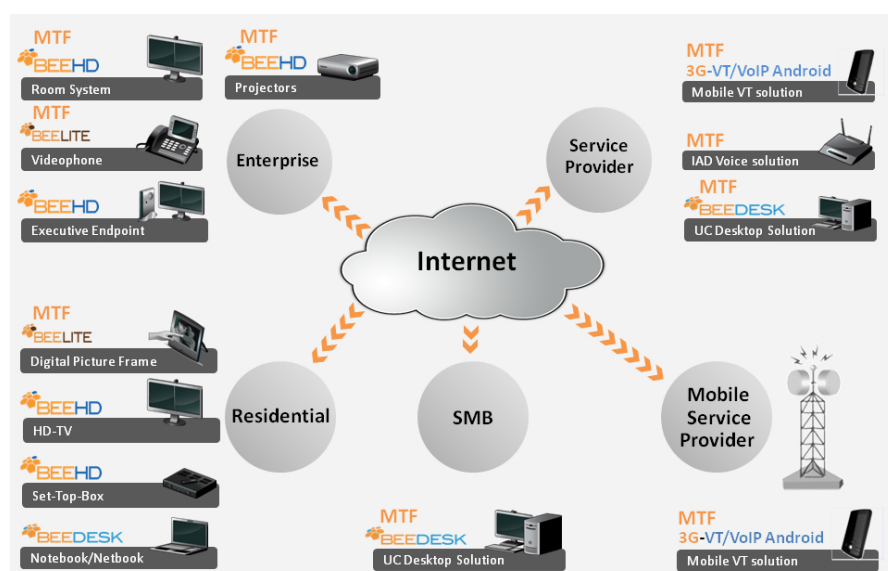
アンドロイドについては、すでにスマートフォンを開発する中国や韓国のメーカーからたくさんのお受注をいただいています。今後もアンドロイドを実装した端末は増えてくると予想されていますので、日本においても是非力を入れたと考えています。

橋本：今後御社として BEE シリーズに力を入れていくというお考えでしょうか。

板橋氏：はい。今までは MTF という形でお客様にソースコードをご提供しての開発支援を行ってきました。

今後は、より多様化が予想される開発ニーズに柔軟に対応するために、開発から市場投入までの全ての工程やそれに伴う時間の削減を可能とする BEE シリーズはお客様にとって魅力のある製品だと自負しています。

もちろん、どうしても内部に独自の変更を施したい、ソースコードが無いと安心できない、独自のメディアエンジンと組み合わせたいというようなお客様には、従来の MTF という形でのご提供も継続いたします。



BEE による各種製品開発イメージ

橋本：御社はサーバ側も得意とされていますね。

板橋氏：はい、お客様からも RADVISION はサーバ側の会社という評価をいただく場合がよくありますし、これからもサーバ市場を拡大したいと考えています。

開発ツールキットをベースとする B2BAF は、従来は IP-PBX 市場を想定していました。しかし既にビジュアル端末のスイッチとしても豊富な機能を実装済みです。HD のビデオ端末サポートに加え、各拠点に分散配置される複数の PBX が連携して一つのアプリケーション機能を提供できるという特徴もあります。最近流行りのクラウドのような運用が可

能となります。

また、クアライアントにおける BEE 同様、よりパッケージ化されたソリューションとして SSB (SIP Server Box) という製品もあります。日本では今まで販売リソースの関係であり導入実績がありませんが、機能は BlackBox で良いので、より早く、安く、品質の良い SIP サーバをお探しのお客様にはぴったりの製品です。

さきほどご説明しました、豊富な導入実績と相互接続実績を誇る開発ツールキットがベースですから他のツールキット機能との融合による拡張も容易です。その部分も含む強力なサポートが一元的にご提供できます。Asterisk のようなフリーのライブラリをご検討いただいているお客様にも、トータルのコストダウンと迅速な市場導入で魅力をご理解いただけると自負しています。

橋本：テストツールやモニターツールについてご説明いただけますか。

板橋氏：当社では開発ツールに加え、アプリケーションの動作をテストしたり、あるいは、品質をモニタしたりする試験・評価ツールもあわせて提供しています。

これらのツールは、音質や画質、あるいは送受信されるパケットなどに問題がないかチェックを行うためにあります。問題があれば、必要に応じて開発ツールに戻り、修正したりしてブラッシュアップします。

たとえて言えば、開発ツールとテストツールは、車の両輪の関係に似ています。

近日中に、従来の「ProLab Testing Suite」が HD に対応することに加え、画質・音質を分析評価するツール「VQ Monitoring」が発売される予定です。

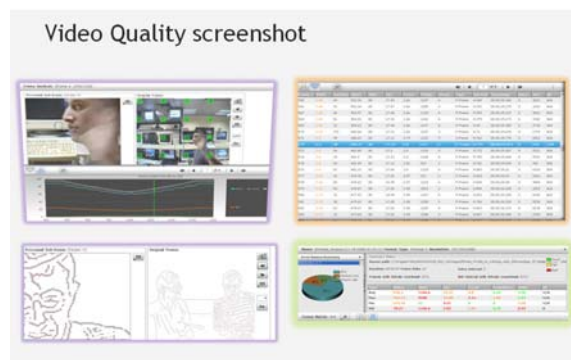
BEE シリーズの開発ツールと併せて活用していただければ、開発効率が格段に上がると信じています。

(次ページへ続く)

橋本：VQ Monitoring についても詳しくおしえてください。

板橋氏：VQ Monitoring は、G.1070 で定められた VMOS 自動測定機能を中心とする高機能な画質測定ツールです。ネットワーク上のパケットから音声・動画フレーム情報を再構築し、瞬時に MOS 評価を行うとともに原因分析、対策による効果予測までを行います。

当社のテストツールは従来製品開発者向けに販売していたのですが、インターネット接続事業者のネットワーク監視や社内ネットワークを管理にも十分に対応できる豊富な機能を装備しており、運用・管理ツールとしても着目され始めています。



VQMonitoring 画面イメージ

また、VQ Monitoring は、SDK でも提供しています。WINDOWS や Linux で動作するお客様のモニタ製品に容易に VQ Monitor 機能を組み込み、リアルタイムに分析することもできます。

橋本：今までご紹介いただいたツールを導入する場合ライセンス契約になると思いますが、開発ニーズに合わせていくつかの種類があると同っています。

板橋氏：弊社製品の導入目的は個々の案件毎に違うと認識しています。お客様のビジネスモデルや開発ステージに合わせた多様なライセンス体系がありますので、お客様にお話を伺いながらニーズに合わせて最適なものを提案してござ

す。

もちろん、ツールキットを納品してそれで終わりではなく、当社のスタッフが、国内パートナー様と共に開発の最初から最後まで責任を持ってフルサポートをさせていただきますので、安心して開発に取り組んでいただくことができます。

橋本：ところで、話は変わりますが、TBU パートナーについて伺います。

板橋氏：現在(2010年3月現在)、NTTアドバンステクノロジー株式会社、アイピーネットフュージョン株式会社、サクサシステムエンジニアリング株式会社の各社様が TBU パートナー企業です。

今まで日本での TBU 事業の展開において多大なるご協力をいただいております。今後も TBU パートナー企業様と協力関係を強化しながら日本の販売を拡大させていきたいと考えています。

それに加え、現在のパートナー企業様は得意分野がそれぞれありますので、それ以外のところでの、新たなパートナーを開拓していきたいと考えています。

たとえば、組み込み技術、フィールドエンジニアリング & サポート、システムインテグレーションの各分野のいずれか、あるいは、それら全てに強みを持つ企業様との提携を希望しています。

こういった企業様を交えたパートナーグループとしての協力体制を強化することで、日本国内でのお客様に満足いただける形のラドビジョンソリューション提供とフルサポートの展開を充実していきたいと考えています。

橋本：開発者向けのコミュニティをラドビジョンで開設しているそうですが、概要について教えてください。

板橋氏：当社では、開発者の皆様にラドビジョンについてもっと知ってもらいたいという考えから、英語サイトではあり

ますが、多くの開発者の方々とラドビジョンとの橋渡しをする、Web 上でのコミュニティサイトを開設しています。



RADVISION 開発者コミュニティサイト例

より多くの開発者の方にリーチするためには、自社の情報をできる限り開示していくことがとても大切であると考えからず。

このコミュニティサイトでは、製品に関するテクニカルな情報や意見交換が行える電子掲示板、ラドビジョンスタッフによるブログ、さらに、定期的にラドビジョンの情報を提供するニュースレターなどが提供されています。

ユーザ登録していただければ、誰でも無料でご利用いただけます。

登録されたユーザは、各種ライブラリ製品のプログラマーガイドやレファレンスマニュアル、または利用例(サンプル)などの情報にアクセスすることができます。これによってたとえば、購入前に簡単に評価するということも可能です。(注:一部製品は除く)

このサイトでは、ラドビジョンのノウハウや経験が可能な限り提供されていますので、この機会に是非活用していただければと思っています。

また、ブログでは当社のスタッフから皆様へのオープンな情報発信を行っておりますし、一方、電子掲示板においては、世界中から参加している開発者の方とラドビジョンのスタッフとが、製品や技術についてさまざまな意見や情報をワールドワイドに交換しあっていますので、有意義な機会かと思

います。

是非、日本の皆様もこのコミュニティに活発に参加していただければと思っています。

橋本：それでは最後に抱負などがありましたらお願いいたします。

板橋氏：当社はイスラエルの会社ですが、冒頭でもお話ししました通り、ワールドワイドに展開をしており、IP コミュニケーション技術においては、会社設立より 18 年間で培った実績が数多くありますので、日本の皆様にも必ずやお役に立てるソリューションを提供できると確信しております。

また当社は、日本のコミュニケーション市場とともに成長していきたいと考えています。そのために、外資系ながら日本にしっかりと根ざした企業として定着し、製品提供においても、またユーザの皆様のサポートについても、日本において全て完結できるような体制作りも現在着々と行っております。

最近の業界の動きは激しくなっています。ラドビジョンにとって今年は大変革期であり攻めの年と考えています。今年、日本国内の IT 系やインターネット系の展示会に積極的に出展する予定です。

これを機会に日本の皆様には是非ラドビジョンを知っていただければと思っています。

橋本：ありがとうございました。

【連絡先】

RADVISION Japan 株式会社

〒110-0016 東京都台東区台東 1-32-8 清鷹ビル 3 階

TEL.03-5816-8950

e-mail: titabashi@radvision.com

WWW: <http://www.radvision.jp/>

Developer Community <http://developer.radvision.com/>